

「僕の存在」

鹿児島県 大原浩太

高3になって最初の頃、クラス対抗でソフトボール大会があった。僕のクラスは女子が圧倒的に多く、男子が打席に立つと、女子の方から「かつ飛ばせー、〇〇」と名前入りの声援が送られていた。僕も少し期待しながら打席に立った。すると、僕だけ名字だった。

なんでだよ。

思わず女子の方を振り向いてしまった。確かに僕は女子の友達が少ない、というかいない。まあ女子と話すの苦手だし、と半ばあきらめていたことではあるが、改めて自分のクラスの知名度の低さを目の当たりにして、僕は今までにない焦りを感じた。今年は高校最後の年、おそらく人生で最も輝いているはずの1年を、僕はクラスメートに名前も覚えてもらえない存在で終わってしまうのか。どうすることもできないままに月日は流れた。

そんな僕にもチャンスは巡ってきた。学校の一大イベントである文化祭で、なぜか主役に抜擢されたのだ。もちろん断ることも考えた。今までこんな大きな役をしたことがなかったし、そもそもこの劇の主役って女だし……。だいたい主役なら女子にも人気があるK君とかがやったほうがいいんじゃないのか。僕なんかが主役をやって、後で「なんで大原君なんかが主役やるのー、つまんなーい」なんて陰口を叩かれたりするんじゃないのだろうか。いろいろな心配や不安が頭を埋め尽くした。しかし、僕はそんなネガティブ思考を全部ぶっ飛ばして主役を引き受けた。女役でもなんでもやって、クラスどころか学校中のみんなを腹の底から笑わせて、そして3年1組の大原浩太という存在を全員に知らしめてやるんだ。僕の一世代の大勝負だった。

文化祭本番、まあ自分で言うのもなんだが、僕らのクラスの劇は大成功だった。もちろん僕も主役として多くの人を笑わせ、大いに自分をアピールすることができたが、もうそんなことはどうでもよくなっていた。クラス一丸となって練習や準備をし、劇を成功させたこと、その中で僕もクラスの一員として自分の役割を果たせたこと。それだけで、僕は十分にうれしかったし、満足だった。

結局、僕は未だに女子とうまく話せないでいる。でも焦る必要はない。僕はこのクラスの一員、大原浩太としてちゃんと存在しているのだから。

でも、やっぱり名前ぐらいは覚えて欲しいなあ。